# 河川空間とまち空間の融合
# 愛西市かわまちづくり計画

平野唯宇[1]

[1]木曽川下流河川事務所　調査課（〒511-0002 三重県桑名市大字福島465）

愛西市を核として、様々な姿を見せる河川とそれに繋がるまちを活性化するため、地域の景観・歴史・文化及び観光の「資源」や地域の創意に富んだ「知恵」を活かした空間形成を目指し計画を策定。計画特徴・計画策定までの取り組み及び具体化に向けた動きを紹介する。

キーワード：愛西市, かわまちづくり, 歴史, 観光資源

## １．はじめに

愛西市は尾張地域にあって、木曽川を挟んで三重県（桑名市）と岐阜県（海津市）に行政界を接する愛知県最西端に位置する市である。その位置は、熱田（名古屋市）から伊勢への経路にあたり、東海道の迂回路として利用された脇往還の佐屋街道や、津島神社への参詣道であった津島街道が市内に開設され、佐屋宿や佐屋三里の渡しなどが置かれるなど、人々の往来で発展した歴史を有している。愛西市かわまちづくりでは、本市の魅力・歴史を踏まえ、河川空間とまち空間の融合を推進する取り組みを行っている。

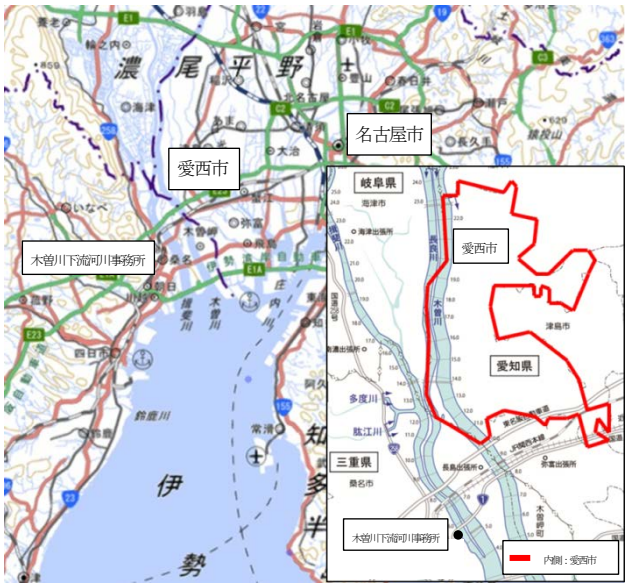


図-1　愛西市位置図

## ２．かわまちづくりとは

かわまちづくり事業とは、水辺に古くから培われた地域の歴史や文化、人々との生活のつながりなどを地域特有の資源から新たな価値の可能性を生み出す取り組みである。かわまちづくり事業の推進に向けては「かわまちづくり支援制度」という制度が設けられており、同制度は河口から水源地まで様々な姿を見せる河川とそれに繋がる町を活性化するため、観光基盤となる「資源」や地域の創意に富んだ「知恵」を活かし、市町村、民間事業者及び地元住民と河川管理者の連携の下、河川空間とまち空間が融合した良好な空間形成を目指すものである。また、河川利用の面においては占用許可の緩和により平成23年3月から全国の河川で、民間事業者が飲食店、オープンカフェ、広告板、照明・音響施設、バーベキュー場等を設営することが可能になったことから様々な利用スタイルでの動きが広がっている。

図-2　かわまちづくりイメージ（広島県 元安川）

## ３．愛西市かわまちづくり計画

(1) 愛西市に至った経緯について

愛西市やその周辺地域では、これまで水と深く、長い戦いの中、様々な問題を克服しつつ発展してきた。船頭平閘門、渡船の渡し場、輪中などにその歴史を垣間見ることができる。治水の歴史を学べる施設や道の駅など、観光の拠点となる施設（図-3）が複数存在し、地域の人々の生活に密接に関わってきた土木的建造物も点在している。その一部であるケレップ水制（図-4）は公益社団法人土木学会が認定する土木遺産に認定され、構造物としての貴重性に加え、生物にとっては水制間の湿地環境が、生育・生息場となっている。また、イベントにおいては、木曽川観光船（図-5）やマラソン大会、地引網体験、野鳥観察会など木曽川をフィールドとしたイベントや体験プログラムが存在しており、幅広い世代をターゲットとした取り組みがなされている。しかし、魅力ある地域固有の観光資源、各施設の連携は不十分であり、環境整備についてもケレップ水制間の陸地化や樹林化が進んでいるため、今後さらに生物の生育や生息を考慮した良い環境づくりを進めていく必要がある。豊かな観光施設と貴重な土木構造物から愛西市を核として地元住民と行政（愛西市）が、かわまちづくり事業を通して地域活性化に繋げていきたいと声を上げたことがきっかけとなり、事業着手が決定した。

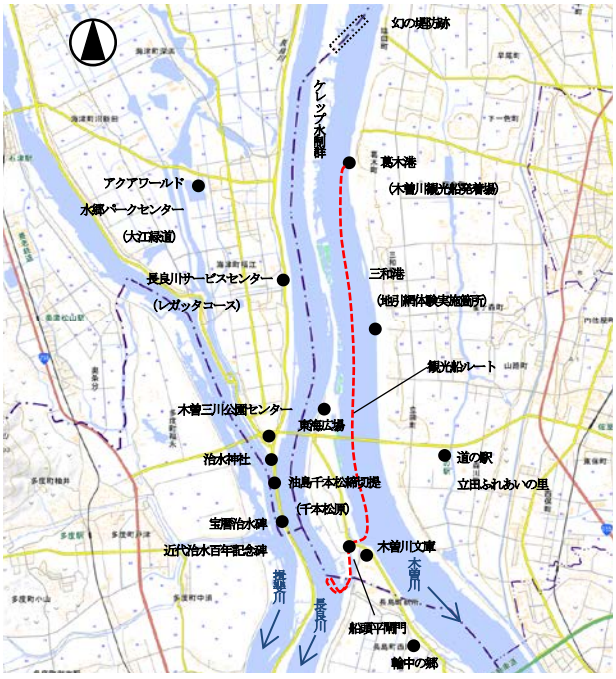


図-3　計画対象周辺図

図-4　ケレップ水制群

図-5　木曽川観光船（船頭平閘門）

(2) 愛西市かわまちづくりの特徴

事業の特徴として、計画の策定が早かったことや周辺の自治体との情報共有を密に行っていること、かわまちづくり事業の整備後も賑わいが持続できることの3点がある。

(a) 愛西市木曽三川ミズベリング協議会

愛西市木曽三川ミズベリング協議会（以下：協議会という）は、愛西市や地元団体等がかわまちづくりを進めるため設立した。本協議会は、かわまちづくりの整備完了後も水辺を愛する多くの人を巻き込み、まちと水辺が一体となった、魅力あるまちづくりを継続して行える場として、永続的な活用を視野に入れている。名称にミズベリングと謳われているのはそのためである。そして、この協議会は、平成29年度8月に行われた準備会と第3回までが1ヶ月ピッチで4回開催された。協議会の開催ピッチが短かったことや現地視察（図-6）が行われたことで、同計画の方針に対する意見が早急に一致し、短期間での策定を実現したことが特徴である。

図-6　愛西市木曽三川ミズベリング協議会（現地視察）

(b)海津市との連携

愛西市かわまちづくりでは隣接している海津市とも連携し、協議会にはオブザーバーとして参加していただくなど他のかわまちづくりとは異なった特徴がある。協議会では現状の利用客の動向や外国人留学生を対象とした周遊ツアー（図-7）を行っていることを情報提供いただいており、周遊ツアーにより観光施設や木曽三川公園が世界的な旅行サイトで高評価を得るなどしているため、今後も連携を深めることで海外へのPRや集客に繋げることができる特徴も持ち合わせている。

図-7　留学生周遊ツアー（木曽三川公園センター）

(c) 持続するかわまちづくり

かわまちづくり事業として水辺整備を行うことはもちろんだが、継続して活用がされ、賑わいをみせるには工夫が必要になる。国と市で人々が訪れる良好な河川空間のみを形成しても持続は見込まれないため、愛西市では様々な観光資源やイベント等により持続可能なかわまちづくりを形成していく。例えば幻の堤防（図-8）がある。これは、昼間の干潮の時間でしか姿を見せない貴重な観光資源であり見られる時期も限られてくる。このように集客力を秘める施設と別の施設の連携を深めることで愛西市としての魅力を確立させ、持続して人気が得られるという計画の特徴がある。

図-8　幻の堤防（干潮時）

(3) 計画概要

特徴、地域特性、工夫等を踏まえ、「木曽三川の歴史と自然環境を学ぶ拠点づくり」をコンセプトとし、これらに必要となるハード整備及びソフト施策を実施していく。具体的には既存の地域資源をつなげエコツアー、インフラツアーとしての観光ルートを設定することにより舟運の活性化を図りさらなる観光振興につなげる。ケレップ水制間には川らしい環境を創出するとともに地域としての魅力を向上させる。さらには近隣の港（四日市港など）への外国客船の寄港等に伴うインバウンド対応としてソフト対策の充実化を図ることで地域活性化に繋げる。また、各施設間では散策・サイクリングを通じて、健康増進に貢献するねらいもある。

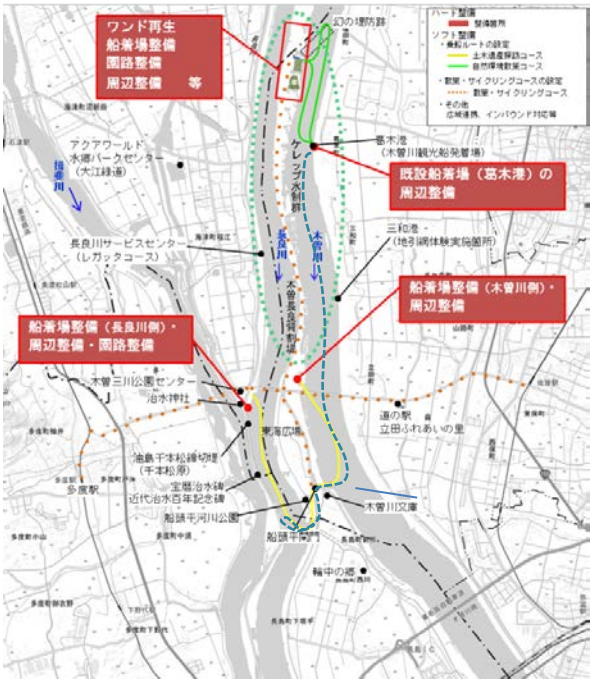


図-9　整備概要図

（4）ソフト施策

現在、愛西市観光協会により「船頭平閘門」（国指定重要文化財）の通船体験を目的とし、木曽川、長良川を周遊できるガイド付きツアー「木曽川観光船」が運行されている。12人乗りの舟による春季から秋季にかけた土・日・祝日の運行で、利用客は104便運行で1,200人の利用があるなど人気が絶えない観光名物である。多くの利用客に伴い、かわまちづくり事業にて運行ルートの充実化を行う。具体的には、エコツアー・インフラツアーとパッケージ化を行い、自然環境散策コース・土木遺産探訪コースと分け（図-9）、自然環境散策コースではケレップ水制間の湿地再生箇所で下船し、植物や鳥類等の自然観察を行うコース、土木遺産探訪コースでは船上から体験するインフラツアーとして、船頭平閘門の通船体験をし、木曽川と長良川を往来するほか、長良川側に船着き場を設け、治水神社や千本松原などの散策を行う。2つのパッケージから、点在する地域資源を関連付けて

観光資源として活用し、その価値を向上させる。さらには、人と人とが交流できる場の提供やイベントの提供を行い、企業との連携では、ウォーキング企画など地域における体験プログラムを充実化させ、情報発信やツアーの展開を図る。しかし、これらのソフト施策を行っていくには、船舶操縦や観光ガイドの人材確保・育成が課題となっている。観光船に限らず、様々なソフト施策において人材が重要となるため、今後、取り組んでいきたいソフト施策のみ進めるのでは無く、人材の確保・育成も視野に入れ、実行していく。

（5）ハード整備

ソフト施策に伴ったハード整備を行う。具体的な取り組みは、ソフト施策で述べたように、運航ルートの充実化から木曽川と長良川それぞれに船着き場の整備を行う。また観光ルートの一部であるケレップ水制については水制間の陸地化や樹林化が進行しているため、従来の湿地を再生するとともに観光船から降りた際にアクセスしやすい環境の整備（図-10）を行う。これにより、観光船によるアクセスの向上、環境面においては〝川らしい水辺の創出〟が得られる。人々が近づきやすいハード整備を進めることによって、本来のかわまちづくりの意味が十分に果たせると考えている。

図-10　自然探訪コース（散策路イメージ）

## ４．地域との協力

愛西市かわまちづくりでは現在、あいさいボランティアガイドの会の主催で幻の堤防の見学会、あいさいワンダーワンド探検（図-11）を年に2回程度開催している。このイベントのように1人の住民として、愛西市を盛り上げていきたいという方との連携やサポートなども今後積極的に行っていきたいと考えている。

図-11　ワンダーワンド探検（ガイド説明の様子）

## ５．今後の取り組み

今後は令和5年度を目標にハード整備やソフト施策を実施していくが、それらの完了をもって活発的な利用や活用がなされるよう、広報活動にも力をいれていく必要がある。具体的な取り組みとしてはSNSを用いた広報活動である。Twitter・Instagramを使用し、写真や動画にて普段は見られない自然やまちの魅力を伝えることで全国的な周知を見込む。愛西市かわまちづくりに興味が無い、あるいは知らない方にどのように広報活動をしていくことが効果的かをSNSに限らず、今後の課題として継続して考えていく必要がある。

## ７．おわりに

愛西市かわまちづくり計画の登録より約1年が経過した。特徴でも述べたように、計画に対する意見が早急に一致したことで、今年度からはハード整備やソフト施策について整備が加速する。将来の利用者、地域の住民の意見を積極的に取り入れ、親しみが深くなるような場の提供の創出を国土交通省としてサポートしていきたい。

**参考文献**

1）　電子国土Web（国土地理院）